

# 1, 2歳児の表現と他者との関係性に関する一考察

仲嶺 まり子<sup>1)</sup> 秋元 文緒<sup>2)</sup>

Discussion on influences of personal relationship to expressions of  
one-two years old children in their interaction with others

Mariko NAKAMINE<sup>1)</sup> Fumio AKIMOTO<sup>2)</sup>

## 【要 旨】

本研究は、「1, 2歳児一人一人が、周囲との関わりを通して、心で感じた思いを表現として表していく過程」の検証を目的にVTRの振り返りを行った。VTRは、「1, 2歳児の表現活動とふれあい遊び」の準備活動における指導者と子どもの初対面の場面である導入時の15分間を取り上げ、事例にまとめ分析した。その結果、Tの気持ちを添わせた表現の受容、子どもと徐々に気持ちが通じ合う様子、ふれ合いにあまり関心を示さなかった子どもの自分もやってみたいという気持ちの芽生え、その心の動きが手合わせや笑顔に表現される様子を捉えることができ、表現が他者との信頼の上に成り立つことが示された。

さらに、学生対象にVTR視聴を実施した結果、「子どもは自分の姿や存在が認められていることで安心して活動に取り組めるようになること」、「指導者は、常に子どもの様子を見ながらどのような援助が必要かを考えなければならないこと」等の学びが認められ、VTR視聴は、保育者の役割や子ども理解を深める上で効果的な教授法であることが示された。

## 【キーワード】

1, 2歳児 表現 表現の受容 信頼関係 ふれ合い

## 1. はじめに

本研究は、「1, 2歳児にはどのような表現活動（音楽表現）手法が適しているのか」についての調査からスタートした研究である。

1, 2歳児の表現活動を行う時、設定された項

目に沿って活動を進めるというあり方、或いは物語の中に表現活動を挿入し、様々な登場人物等になりきって表現するというあり方、応答形式で子どもたちの中から出てきたものを表現するというあり方、ゲーム遊びと表現を融合させるなど様々な手法が考えられる。そこで筆者は、1, 2歳児の表現活動の公開研修での実践

<sup>1)</sup> 別府大学短期大学部 <sup>2)</sup> 埼玉大学 昭和女子大学

を通して、それらの手法についての調査研究を行うことにした。

A市保育部会ブロック研究テーマ「1, 2歳児の表現活動とふれあい遊び(音・ことば・物語・物に出会わせる)」の講師として、筆者が公開研修を行うこととなった。そのため、公開研修を開催するK保育園の1, 2歳児の保育見学及びこれまでの保育活動について担任保育士等への聞き取り調査を実施し、園児のこれまでの経験を踏まえた表現活動を創案した。次に、公開研修の一週間前に準備活動として創案した活動を園児と実践し、公開研修に向けて修正を行った。

準備活動では、筆者と子どもたちは初対面だったことから、互いの様子を伺いながらの緊張したスタートであった。活動が進むにつれ徐々に緊張がほぐれ、子どもたちの動きもダイナミックになっていった。活動中は、担当保育士が子どもを膝に乗せたり、声かけをしたりして、指導者をサポートした。このような準備活動を行ったことで、公開研修当日は子どもたちも伸び伸びと動き回り、楽しくスムーズに活動を行うことができた。表現活動の手法の研究にあたっては活動中の子どもたちの姿から、活動内容の考察を行うことを目的に準備活動と公開研修をVTRに記録した。VTRの分析は、客観性を考慮し共同研究者である秋元が担当した。

VTR視聴を通して、秋元より次のような意見が出された。まず、公開研修当日の活動では、準備活動を経験したことで指導者と子どもたちの間に信頼感が芽生え、スムーズに活動が進んでいること。一方、準備活動では、指導者と子どもたちが互いの様子を探りながら、或いは、互いの思いをぶつけ合いながら活動が進められており、そのため、互いの緊張がほぐれ徐々に距離が縮まる様子が観察できること。また、子どもたちが徐々に自身の思いを表現するようになる過程が読み取れ大変興味深い。という感想と共に、まずは「1, 2歳児がどのような過程を経て自分の思いを表すことができるようになるのか、という視点でVTR分析を行う

ことが必要ではないか」という提案がなされた。この事柄を受けて、今回の研究テーマを「指導者や周囲との関係性の変化がどのように表現につながるのか」とし、VTR分析を行うことにした。

## 2. 問題の所在

公開研修に向けての準備活動は、子どもたちとの初めての出会いの場であったことから、導入時に、子どもたちのお気に入りの絵本『だるまさんが』の読み聞かせをおこなった。絵本を覆った布を取ると同時に、子どもたちは「だるまさんや、だるまさんや、知っちゃん」と喜び、だるまさんの動作の真似(写真1. 読み聞かせを楽しみながら「ピヨーン」の場面で立ち上がって絵本の場面を表現する子どもたち)をしながら読み聞かせを聞いていた。

読み聞かせの後、子どもたちが慣れ親しんでいる「だるまさんが」ということばを利用して手遊びを行ったところ、子どもたちから思いもよらぬ声が上がった。指導者が「だるまさんが 頭」と手を頭に置くと、「ちがう!」と言う。もう一度「だるまさんが 頭」と手を頭にあてると、また「ちがう!」と言う。これに他の子どもたちも触発され「ちがう!ちがう!」の連発が始まったのである。指導者は、子どもたちが、絵本『だるまさんが』に出てくる動作と違うということを言っているということに気づき、咄嗟に「お手々は 頭」と言い換えると、また「ちがう」と言う。結局、最初に「ちがう」と言い始めた子どもが「お手々は これ!」と指差しされたことで、ようやく「ちがう」ということばが、手を指し示していることを指導者は理解することができた。その後、手と手を合わせるふれ合い活動につなげることができたのである。

この「ちがう」のやりとりを通して、指導者と子どもたちとの緊張が少しずつ和らぎ、子どもたちから自然に笑顔が出るようになった。もし、子どもたちの「ちがう」という声を捉えず指導者の計画通りに活動を進めていたとした

ら、子どもたちと心を通わすことができたであろうか、子どもたちから信頼を得ることができたであろうか、もちろん「ちがう」という言葉には子ども一人一人の思いの違いがあるはずである。しかし、子どもの発する声に耳を傾け応答を繰り返すことが、心と心をつなぐ第1歩であることを実感した場面であった。

そこで筆者は、「子ども一人一人が、周囲との関わりを通して、心で感じた思いを表現として表していく過程」について探ることを目的に、VTRの振り返りによる子どもの姿の変容について事例分析を行った。さらに、子どもたちの様子をより客観的な視点で捉える方法として、学生対象にVTR視聴とアンケート調査を実施した。

### 3. VTRの振り返り

#### 3-1. 研究目的

前述の理由から、子どもが自己を発揮して表現する時、また、他者とふれ合おうと行動する時やし始める時のきっかけとなるものは何なのか。ということについて、事例研究を通して、子どもが感じた思いを表現として表していく過程を探りながら明らかにしたいと考える。

#### 3-2. 方法

##### 【研究協力者】

表現活動の指導者、K 保育園 1 歳児クラスの園児（12名）と保育士（4名）

##### 【園児の内訳】

番号	月齢	性別
1.	2歳6ヶ月	男
2.	2歳6ヶ月	男
3.	2歳6ヶ月	女
4.	2歳5ヶ月	女
5.	2歳3ヶ月	男
6.	2歳3ヶ月	女
7.	2歳3ヶ月	男
8.	2歳2ヶ月	男
9.	2歳1ヶ月	女
10.	1歳10ヶ月	男
11.	1歳9ヶ月	男
12.	1歳7ヶ月	男

##### 【日時】

2015年10月30日（金）10：00～11：00

##### 【分析方法】

1. 2歳児の表現活動の実践 VTR による活動の振り返りを行った。振り返りは、VTRでの約50分間の表現遊び活動の中から、絵本『だるまさんが』の読み聞かせからの約15分間の場面を、子どもたちと指導者の音声、行動をすべて文章化した。さらに、子どもの発した言葉、表現や指導者との関係性の変化がコミュニケーションにつながっていく特徴的な2場面を抜き出し、事例としてまとめ、時系列で分析した。

### 3-3. 結果

#### 【事例(1)】

『だるまさんが』の絵本の読み聞かせ後、Tが「♪だるまさんが 頭」と手を頭に置いて歌いかけると、D男（先生の前に手を後ろにして座っているストライプ模様のTシャツの男の子）が「ちがう」と間髪入れずに声を発する（写真2）。TはD男の反応を受け止めつつ、再び「♪だるまさんが 頭」と歌いかける。今度はE男が「ちがう」と声を発する。そこで「♪お手々を 頭」とTが歌いかけてみると、E男とF男が「ちがう」と言う。さらにTは「♪お手々をお鼻 お手々をお膝」と続けて歌いかけ、そのたびにD男とE男とF男が「ちがう」と言う。（中略）Tは、「じゃあ、♪お手々は どこ？」と手を2回叩いた後に問いかけると「ここ」とD男がTの手元を指さす（写真3）。Tは「ここ？ ここ？」と体のあちこちを示した後、「ああ お手々ここだ!!」と両手をパーに広げて前に出すと、D男の手と合わせて「あ～できた!!」「ほらできた、すごい、お手々はここだ」（写真4）と、F男（腕に2本線のボーダー模様のトレーナーを着て腕を前に出している子ども）とも手を合わせる。その後Tは、一人ひとりに手合わせをし始める。



写真1



写真2



写真3



写真4

【事例(2)】

「♪お手々をパン」とTが歌いながら、子どもたちと「パン」の所で両手を合わせる遊びをしている中、I男(無地のTシャツの男の子)はTの差し出した手に反応せずにただその様子を見

つめている(写真5)。

Tが曲のテンポを速くしてもう一度皆のところを回り始めると、I男は歌い始めからTが手合わせしている方を見ている。自分の隣の子どもがTと手合わせしている間自分の両手を胸の所に合わせ、自分の番ではしっかりTと手を合わせることができる(写真6)。Tと近くにいた保育士は「じょうず!」と手をたたいて喜び合う。その後自分の後ろに座っているG子(先生の膝に座っている女の子)に話しかけ、保育士がI男に手を合わせようと誘うと、初めは片手を出し、次には両手を出して手を合わせる。その瞬間満面の笑顔でG子と喜び合い、G子の隣にいるH男にも手を差し伸べる。

それからTが「お手々ポンと触れたね」「よかったね」と語りかけながらE男、G子と手を合わせている様子を見ると、「もう一度したい」(写真7)と保育士に伝え、再びG子と手を合わせて大喜びした後、H男とも手を合わせ、みなで声をあげて喜ぶ。



写真5



写真6



写真7



写真8

### 3-4. 考察

事例1. は、最初にD男、続いてE男、F男が、Tの歌いかけに対して「ちがう」と発した言葉に対して、Tがその意味する所が理解し合えるまで、子どもたちとやり取りし、問いかけ続けた結果、手を合わせるあそびが成立した事例である。

この「ちがう」のやり取りは、6回続き、その間、子どもたちの視線は常にTに向けられ、Tの視線も言葉を発した子どもたちに注がれていた。Tの子どものどんな表現も受容し、気持ちを添わせていく接し方によって、子どもたちの示す所の「ちがう」という言葉の意味の理解にたどり着き、気持ちが通じ合うことができたのではないかと考えられる。同時に、子どもの、意思表示とも捉えられる表現を引き出したことが、「ここだ!!」とTと子どもたちの思いが一致した瞬間の喜びの表現にもつながったのではないかと考えられ、このことが、場の一体化と共に感情の共有化を図るきっかけになったと考えられる。

事例2. は、事例1. の時点ではTとの遊びにあまり関心を示さなかったI男が、Tと手

合わせができるようになり、その後傍らにいた保育者や他児とも手合わせを行うようになった事例である。

I男の視線の先がどこに向いているのかをVTRで検証してみると、まず、他児と触れ合っているTの様子を目で追い、自分の前に立ったTに視線を向け、その後G子や保育者にしっかりと向けられていた。このことからI男がTや手合わせに対して心を動かしている様子を捉えることができる。

I男は、他児のTへの信頼と手合わせを楽しんでいる姿を見て、自分もTや他児との触れ合いを楽しみたいという気持ちが芽生えたのではないかと推察される。その後のI男の満面の笑顔がその喜びを示していた。

2つの事例から、表現をする子どもの姿に個人差は認められたが、子どもの「やってみよう」「やってみよう」という気持ちを受け止めて歌詞に表し、その場に応じて用いたことが表現を支え、楽しむきっかけ作りに繋がったのではないかと考えられる。そしてそのことが、指導者への信頼に繋がっていったのではないかとということが示唆された。

## 4. 学生対象VTR視聴の試み

前述のVTRの振り返りと事例考察により、1, 2歳児が自分の思いを表現として表していく過程について、指導者への信頼の芽生えが自己発揮及び他者とのふれ合いへの表現に繋がることが確認された。しかし、実践者等による分析だけでなく、より客観的な視点を持った第三者によるVTR視聴と子どもの変化を捉える視点が必要なのではないかと考えから、さらに、学生を対象としたVTR視聴による調査を実施した。

### 4-1. 研究目的

筆者らによるVTR振り返り及び子どもの姿の変容等の分析に関する客観性の検証を目的に、学生を対象としたVTR視聴及び子どもの姿の受け止めにに関するアンケート調査を実施し

た。

#### 4-2. 方法

##### 【研究協力者】

日本語を母語とする幼児教育を専攻としている B 大学 3 年生 19 名。

##### 【日時】

2017 年 7 月 11 日（火）10：40～12：10

##### 【手続き】

視聴は、静音の保たれる教室で実施した。回答用紙と筆記用具を用意し、スクリーンを視聴しやすい位置に設置し、スピーカーは最適視聴レベルを提示して行った。視聴の VTR 画像は、絵本『だるまさんが』の読み聞かせから始まる導入部分の約 15 分間の場面を提示した。回答用紙の（図 1.）の記入方法については、視聴の前に説明を行った。

##### 【VTR 視聴実施方法】

- ・ 1 回目視聴時間：約 15 分
- ・ 回答時間：約 10 分
- ・ 2 回目視聴時間：約 15 分
- ・ 回答時間：約 10 分
- ・ キーワードグループ別意見交換：約 20 分

1 歳児の表現遊びその導入部分について	
I. VTR 視聴 1 回目	
1. 視聴してみて気になった場面について、その内容と感想を記してください。	
2. 視聴してみて何について気になりましたか。そのキーワードを 1 つ挙げてください。 例) 指導者の言葉かけ、子どもの動き、子どもの様子、指導者と子どものやり取り 等	
_____	
II. VTR 視聴 2 回目	
3. 子どもを一人決め、その子どもの様子を観察し、その行動内容を記してください。	
4. 上記を記した後に、どのような感想をもったか、その内容について考察してください。	
III. キーワード別に分かれて意見交換をしてください。	
キーワード _____	
1. 他の人と自分の意見や感想との類似点を記してください。	
2. 他の人と自分の意見や感想との相違点を記してください。	
3. 今日の活動について、感想があったら記してください。	

図 1

#### 4-3. 結果

図 1. にあるように、1 回目の VTR 視聴では、気になった場面とその内容及び感想、2 回

目の視聴では一人の子どもに特定して観察を行うようにし、その行動内容及び感想と考察を記載するようにした。

第 1 回目の視聴では、表 1. に示されたように、「気になった場面」として、その他を含め 5 つの場面が取り上げられた。1. 絵本を読み終えた後、指導者が「だるまさんが 頭」と言ってさわり遊びを始めた時に、子どもたちが「ちがう！」と言った場面について 14 件、2. 絵本の内容に合わせて子どもたちが楽しそうに体を動かしている場面について 10 件、3. 指導者が子どもたち全員とタッチする場面について 5 件、4. 読み聞かせを始める前に絵本を布で隠し「いないいないばあ」と言って、絵本を取り出す場面について 3 件、5. その他の場面 6 件が取り上げられていた。

1. の場面では、「指導者が子どもに合わせて臨機応変に対応している」「積極的な子どもと消極的な子どもがいる」という指導者の対応と子どもの姿を捉えた感想が見られた。2. の場面では、「頭だけゆらゆらさせている」「途中から集中する子」「保育者の膝から立ち上がり体を動かす子ども」等、子どもの姿を捉えた感想が多く見られ、3. の場面では、「対先生だけではなく、対友だちにもなるよう促していた」「うれしそうな子ども、タッチが来るのを待っている子ども」等、指導者と子ども両方の姿を捉えた感想が見られた。4. の場面では、布で隠した絵本を取り出すことで「子どもたちの興味を絵本に引きつけていた」という手法に関しての感想が記載されていた。5. その他の感想では、子どもたちの様子への率直な疑問などが記載されていた。

第 2 回目の視聴では、各自が任意に決めた子どもを観察し、その行動内容と感想の記載を課題とした。表 2. に示されたように、学生が対象に選んだ子どもは 11 名で、そのうち事例 2. に出てくる O 児（I 男）を対象とした学生が 6 名と最も多かった。

また、観察を通しての感想では、「体を動かしていないからと言って、活動に興味が無いわけではないこと」「子どもによって興味が異なる

表1. 第1回目視聴での「気になった場面・感想及び内容」

項目	学生	気になった場面	感想及び内容
1 「ちがう」と子どもたちが反応した場面	1	「ちがう」と反応した子どもの場面	指導者の声掛けに対して積極的な子どもと消極的な子ども
	2	「ちがう」と反応した子どもの場面	そのまま子どもたちひとりひとりと関わる時間に活動を展開させていた
	3	子どもの「ちがう」に反応した場面	子どもが納得して活動できるように、子どもに合わせて臨機応変に対応していた。
	4	「だるまさんがあたま」と保育者が言って遊びを始めた時に、子どもたちが「ちがう」と言って応えていた場面。	指導者の「これかな？」という問いかけに対して「ちがう」というやり取りを楽しんでいるように見えた。
	5	だるまの手遊びの途中で、子どもたちが「ちがう」と言い出した場面	子どもたちの状況や態度に合わせて臨機応変に変えていくことが大切。
	6	だるまの手遊びの途中で、子どもたちが「ちがう」と言い出した時に、子どもが納得するまで続けていき、そこから全員との触れ合いに変化させていった場面	全員が参加しているという気持ちを持つことができる。リズムをつけてながら行ったことが、より子どもが遊びに興味をもちやすくなっていた。
	7	子どもが「ちがう」と言った後に遊びが展開された場面	その時その時の子どもたちの反応に合わせて、保育者側が計画していた活動内容を柔軟に変化させていくことが大切だと思った。
	8	子どもたちが「ちがう」と言った時に、子どもたちの様子を見て別のやり方をしたり、子どもたちに問いかけながら一緒にできるように考えたりする場面	その時の様子に合わせて展開していくことは難しいと思うが、子どもたちの声を聞きながら、実際に保育者が子どもと触れ合って目を見ながら遊ぶことで、警戒心がほぐれていった。これはとても大切なことだと感じた。
	9	子どもが「ちがう」と言った場面	子どもに「こうやってね」「こうやるよ」と言うのではなく、子どもがどんなことをしたいのかを表現として受け止めている感じがしてすごいと思った。子どもの「ちがう」という言葉で、活動の流れが少し止まってしまうかと思ったが、指導者が動いて、子どもたちが指導者に注意を向け、全員活動に加わるようにしてすごいと思った。
	10	子どもが「ちがう」と言った場面	「ちがう」と言われてからの遊びの展開の変え方と速さ
	11	子どもが「ちがう」と言った場面	「じゃあどこがいいのかな」と子どもに問いかけ、子どものやりたい気持ちを汲み取って活動を変えていた。初めは「ちがう」と否定的な言葉を発していた子どもたちも、徐々に活動に積極的になっていったので子どもの思いを尊重しながら、活動を変化させていくことが重要だと感じた。
	12	子どもが「ちがう」という場面	指導者とコミュニケーションをとることを楽しんでいた。子どもは「手は頭でも膝でもなく、手だよ」と伝えたいようであった。
	13	子どもが「ちがう」と言う場面	子どもは楽しんでいるでも、自分が指導者の立場だったらとても困ってしまう気がした。指導者は臨機応変に先生と手を合わせることができると見つけ、それを遊びにつなげていた。
	14	子どもが「ちがう」と言う場面	「だるまさんが」の絵本には、そういうシーンがないので、それがわかっていて言ったのかなと思った。
2 絵本の読み聞かせの場面	1	「だるまさん」の絵本の場面	頭だけゆらゆらさせている子
	2	絵本を見ている子ども簿面	最初は指導者を見ているだけの子どもも、見慣れている絵本がでてきて、だんだん自分の体を動かしたり笑顔が見られるようになった。
	3	絵本の内容に合わせて楽しそうに子どもが表現をしている場面	体全身を使って楽しそうに表現をし、時々保育者の方を見て「自分の姿を見て」と言わんばかりに見ていた様子がかわいかった。保育者や周りの友達と遊びを共有しているところが興味深かった。
	4	絵本「だるまさん」を読んでいる場面	手や体を丸めたり、伸ばしたり転がして遊ぶ遊びが展開されていくのではないかと考えた。
	5	絵本を読む場面	ただ読むのではなく、一緒に動いて、子どもが自然にだるまさんのまねをして、表現を引き出す方法だと思った。
	6	絵本の場面	好きな絵本で親しみを持てるように気を引く。絵本に合わせた動きで、体を動かすことで興味を持つ。最初から見入る子、途中から集中する子、友だちとの触れ合いで喜ぶ子。
	7	絵本の場面	倒れたりとんがったりする場面では、保育者の膝に座っていた子どもも立ち上がり体を動かす姿があった。
	8	絵本の場面	なじみのある絵本を使うことで、初対面でもある程度空気を共有できる。1番最初の「いないいないばあ」の幼児の置き去り感とその後の（体を揺らす場面）からの指導者への視線が全く違うものに感じられた。
	9	絵本の場面	初めは、体を揺らすことを見ているだけという感じだった子どもたちが、回数を重ねるごとに、みんなが体を揺らすようになっていた。言葉かけひとつひとつに反応して、にこっと手を顔に当てて笑ったりする場面はかわいらしかった。
	10	絵本の場面	子どもたちが何度も見たことがある絵本だったと思うので、それを導入に使うことで、子どもたちを引き付けることができたとと思う。子どもが気に入っている動きや言葉を楽しそうに自分でもやっているのが印象的でした。

項目	学生	気になった場面	感想及び内容
3	1	指導者が全員と手を合わせていた場面	対先生だけでなく、対友だちにもなるように促していた。
	2	手を当てる場所を変えたり、「お手てをバン」と子どもたち全員と触れ合う遊びに展開させていく場面	
	3	初めは、手を合わせることができなかった子どもも、2回目からは自分から手を合わせていた場面	子どもが遊びに興味をもてるような関わりが大切。
	4	指導者と手を合わせて、次に友達同士、保育者と手を合わせるという流れで、子ども同士で関われる流れになっていた場面	
	5	指導者と子どもがタッチした場面	うれしそうな子ども、タッチが来るのを待っている子ども、指導者が来ても手を伸ばさない子ども等がいたが、指導者は子どもの反応とは関係なくすべての子どもとタッチしていた。
4	1	絵本を布でかぶせている時に子どもたちが何が始まるのかなど興味をもってひきこまれている場面	子どもたちの興味・集中を引き付けるとてもおもしろい方法
	2	絵本を布で隠してから出していた場面	絵本の内容と合っていて、子どもが活動に参加しやすく初対面でも興味を持ち易い。
	3	絵本を出す場面、ただ見せるだけでなく、「いないいないばあ」を試みようかと声掛けをして出していた。	子どもが引き付けられている様子があったのですごいと思った。
5	1	反応の薄かった子やカメラが気になっている子も最後の方では楽しそうにしていたこと	そういう子もそのまま進めて平気なんだな
	2	指導者の方を見て話を聞いているようだけれど	活動そのものにはあまり興味がないのか、手を動かさそうとしない子どもが何人かいた。
	3	青い服の子どもが、歩き回っていた場面	指導者はどのように捉えていたのか。
	4	子どもたちが少しずつ活動に参加するようになっていく場面	初めて会う指導者に対して子どもたちの方に少し緊張している様子が見られ、慣れ親しんでいる保育者の膝の上に座ったり、その保育士の表情を確認する姿が見られた。
	5	初対面の指導者と子ども	子どもも様子をうかがっている姿があり、指導者をじっと見ているだけだったが、少しずつ指導者と一緒に体を揺らしたり、手を動かしたり、声を出したりする子どもが増えていった。
	6	全体を通して	絶対に子どもを見ていること。一人ひとりと関わりを持ちに行くこと。言葉のわかり易さ。子どもの様子で遊びを変化させていて、想定した流れでなくとも自然な関わりができることが引き出しの多き故だと思った。試行錯誤することは、悪でも失敗でもないのだ。ということ、幼児の反応を見る技量と引き出しは必要だが逆にそれがあれば別のルートを通っても目的地（主活動）にたどりつくことができる。

ること、遊びの楽しみ方が違うこと」「子どもは自分の姿や存在が認められていることで安心して活動に取り組めるようになる」等、1回目の記述に比べ、より子どもの内面を捉えた内容が記載されていた。さらに、指導に関する感想では、「指導者の援助によって子どもの活動が活性化していく様子から、常に子どもの様子を見ながらどのような援助が必要かを考えなければならない」「子どもの姿を認める声かけ、子どもの興味の持つ教材準備の必要性」等、1回目の感想に比べ、援助についての考えがより具体的に記載されていた。

2回目の視聴後、1回目の視聴後に記載したキーワード（気になった場面）別グループに分かれ意見交換を行った。グループディスカッ

ションでは、各自の取り上げた内容の類似点や相違点についての意見交換及び「本時のVTR視聴活動」に関する感想を課題とした。

表3. に示された「本時におけるVTR視聴活動に関する感想」の集計結果では、「活動をVTRで客観的に見ることで、冷静に保育を見ることができ学びが大きくなる」「同じVTRを見ても、人によって視点が違い、他の人の意見を聞くのもおもしろい」「子どもの反応を細かく観察できてよかった」「子どもとの関わりのおもしろさとむつかしさを実感した」等、VTR視聴を通して、活動の客観的捉えや観察ができたこと、グループディスカッションを通して、子どもの様子や活動場面の捉えについて他者との視点の違いを知り、学びが広がったこ



表2. 2回目視聴の観察における「子どもの行動内容と感想」

対象児	学生	行動内容	感想
O児	1	周りの子がやっているのを見てから動くという感じだった。	元々マイペースでエンジンのかかるのが遅い子なのかなと思った。
	2	「だるまさん」の時も、指導者や周りの子どもに合わせて動いていない。ずっと後ろの保育者やビデオを撮っている保育者を見ている。	友だちと手をタッチすると楽しそう。
	3	絵本の「ずこっ」「にこ」の時は動作をする様子が見られたが、「ぶしゅっ」「ぶっ」の時は動かずにずっと座っていた。	なぜ動くのか。動かないのか気になる。保育者の援助によって子どもの活動が活発化していく様子がうかがえた。
	4	事例2の内容と同じ。	子どもによって遊びの時の楽しみ方が違う。指導する側は、一人に対して数名の子どもがいる中の援助の大切さ。
	5	絵本を見ている時は、よく集中して見ていたが、だるまさんの動きや指導者の動きのまねする等自分の表現をしようとする姿は見られませんでした。	同じ場にはいて、活動に少し興味を向けてはいるけれど、まだ自分もやってみようというところまで思っていない幼児が、活動にうまく入ってこれるきっかけをどうつくるかが、難しいと感じました。
	6	最初はほとんど体を動かさず、絵本をじっと見ていた。みんなが体を動かして絵本を再現しているも、絵本を集中して見ているようであった。絵本が終わると少し後ろを向く回数が増え、あまり活動に参加していないようであった。	最初はいつもと違う指導者に緊張してあまり体を動かしていないのかなと思った。また、おそらくカメラなどいつもと違う環境が気になったのか周りを気にしていた。活動が進む間に、少しずつ緊張がとれていき、手を合わす活動を思い切ってやってみるととても楽しそうにしていたので、それが気に入ったのだと思った。活動の最初から最後までかけて表情や動きが大きく変化しているのが印象的だった。
S児	1	絵本を見ながら揺れ、次の活動ではしばらく反応せずに見ているだけだったが、一度指導者とタッチしてからは「ちがう！」と反応するようになった。途中から飽きたのか寝転んでいたが、「友だちや先生…」の部分では楽しそうにしている所から自分から近づいていっている様子が見られた。	活動に参加するきっかけをすぐにつかめない子どももいて、そういう子どもがどうしてもしたら活動に参加しやすくなるのかを常に子どもの様子を見ながら考えなければいけないと思った。
	2	初めは絵本をじっと見つめ、進んでいくにつれて絵本に合わせて動いていた。活動が変わり、指導者の方を見つめるが、なかなか活動に入らない。指導者の提案にも「ちがう」と言い要求がある様子である。指導者が気持ちを汲み取ってくると少し身を乗り出した様子で、幼児同士になると寝転ぶ様子もある。指導者が手を取ったり、他の場所では楽しそうな様子で活動したりしていると、その中に加わっていた。	絵本の場面ではあまり見えなかったのが注目していなかったが、その後の活動で強く意思表示しているのが気になって見ていた。指導者が1回目に「お手をパン」とした後に「ちがう！」と言いだしたので、「またさっきの手を合わせるのをやりたい」という気持ちが生まれたのだと考えた。指導者と手を合わせる時は力強かったが、他の幼児に対しては、自分から向かっていく様子がなかったため、指導者との関わりを楽しみたいのだなと思った。
A児	1	指導者との関わりを楽しんでいる様子	皆が動いていても周りを見ながら恐る恐る動いているように感じ、どうして周りを見ながら動くのかということが気になった。同時に自分から率先して思いついた動きをやる場面もあり、気になった。
	2	初めは動かずに、指導者の様子を見ていたが、2,3回目の「だるまさんが」の時には、少しずつ頭や手を動かしながら絵本の内容に反応していた。指導者の声掛けに対して反応して体を動かしている様子。	初めは、指導者の動きや様子を観察しているように見えた。体を動かしていないからといって活動に興味がないのではなく、徐々に自分の中に活動の内容を取り込んでいるのではないかと思った。
M児	1	最初は保育者の膝の上に座ってじっと見ていたが、1度降りて一人で活動し、また膝の上に戻ってその後また一人で保育者のまねをし、保育者に見せながら活動していた。その後は飽きてしまったのか、ふらふらと歩いている様子が見られ、保育者が膝の上に乗せようとしてもいやがっているような姿が見られた。	最初は慣れない指導者に緊張しているのかと思ったが、見ていくうちに、自分のペースで好きなように動く様子が多く見られる子なのと感じた。保育者は常にその子のことを目で追ったり、一緒に活動するように働きかけたりしているのが見られて、保育者がどのように関わるかということが重要だと思った。
	2	最初は保育者の膝に座り、指導者のもと絵本をじっと見ていたが反応は少なかった。絵本が始まり、2回目に倒れた場面では保育士が子どもの体を軽く倒すとそれが楽しかったのか、3回目ですぶれる場面では、自ら立ち上がりつぶれていた。その後本を指したり、手を大きく叩いて保育室を軽く走ったりと楽しく過ごしていた。しかしその後手をくるくるする活動が始まると、手をグーにしたりと少し反応していたが、活発さは少なくなり、床にゴロンとなったり伏したりと自由に過ごしていた。	絵本の活動では、周りの子どもや保育士が動いているのを見て、単純でわかりやすいものだったため参加できたが、手をくるくるするのは動きも小さく細かい動きだったので、わかりづらく参加しづらかったんではないかと感じた。
H児	1	保育者の膝の上で絵本を見る→最初は動かずにじっと見る→途中から少し身を乗り出す→指導者に合わせて動いてみるが、保育者の膝に戻る→2回目、3回目、4回目と保育者の膝を移動する。	保育者の膝の上という安心できる場所を安全基地として絵本に合わせて動きを楽しもうとする様子が見られた。様々な保育者の膝の上を移動していたことから、普段の生活で、様々な保育者との信頼関係が築かれていると感じた。「やってごらん」子どもを送り出すことも必要だが、まずは子どもに安心感を与えることが重要であると思った。
E児	1	初めは、何が始まるのか緊張した様子で絵本の動きを一緒にやらず、周りを見ていた。しかし2回目以降から周りの保育者を見つつ、少しずつ表現するようになった。全身を使って楽しそうに表現をし、保育者に見せつつその後の「お手をパン」では友だちとの触れ合いを楽しんでいた。	最初の緊張した様子から少しずつ楽しそうに表現していく様子がとても興味深かった。子どもが自分から活動に取り組むことができるよう周りにいる保育者がお手本を見せたり、楽しそうにしている姿を見せたり、一緒にやってみたりなどの様々な関わり方の工夫があると思った。

対象児	学生	行動内容	感想
W児	1	最初から前の方にいるが、動きは少ない。体を大きく横に揺らすことはやるが、その後の寝そべったり立ったりはほかの子よりもワンテンポ遅れる。(周りを見てから行うので)自分から声を出したりすることは少なく、ただ、じっと指導者の動きを見ていることが多い。自由に動くようになってからは、寝転んだり、活動的な友だちと関わったりしていた。	子どもによって興味を持つことが異なっていて、言葉がけが難しいと思った。期待通りの反応ではないこともあり、その際にどうしたら子どもが表情が変わるのか、動きが変わるのか、臨機応変に対応することが経験の積み重ねによるものだったと思った。
K児	1	初めから指導者の先生に興味を示しつつ、おとなしく見ていた。また、「いないないばあ」という部分も指導者の声に合わせて一緒に声を出していた。ほとんどの言葉に他の子どもたちよりしっかりと反応していた様子で、時折動きをつけながら、後ろを振り返っている様子が見られた。	全体を通して言葉を理解して反応を示したり、動きを付けたりすることができる子どもなのかと感じた。端に座っていたので、絵本が見にくかったり先生に注目されにくいこともある中で、一生懸命動きをつけたり、楽しく反応していた所がかわいらしく思った。
P児	1	他の子どもたちが「ちがう」と言っている中でも、指導者に合わせて手を動かしていた。	子どもはいつもと異なる環境や人がいると緊張してしまうが、自分の姿や存在が認められていると感じることで、安心して遊びに取り組みめるようになる。そのために、子どもの姿を認める声掛けをしたり、子どもが興味を持つことができる教材を準備することが必要だと考える。
B児	1	すぐにできそうなこととそうでないことを、とっさに判別して模倣行動をしているような印象を受けた。	1歳の幼児にこのようなことができるのか、あるとすれば意識的なか無意識的なか知りたい。
C児	1	指導者のすることは、とても興味関心があり、指導者の声に耳を傾けている。他児の様子に関心を持っているようであるが、自分から関わっていく様子はあまりない。	

表3. キーワード別VTR視聴活動に関する感想

グループ	学生	感想
こどもの様子	1	保育の様子を客観的に繰り返し見るといのはあまりないので、様々な気づきがあり、とても勉強になった。
	2	子どもの表情が見難かったこともあり、VTRの撮り方の工夫は必要だと思った。
	3	ダメ出しが多くなってしまったが、その甲斐があって、様々なやり方について話し合えて勉強になった。
	4	注目する子どもが違うだけで、同じVTRを見ていても、感想や捉え方がこんなに違ってくるんだと思った。
保育者の働きかけ	1	保育者の働きかけから、子どもが活動に参加していく様子から、保育者がどのように関わるかという視点で見ている、類似点が多かった。保育者の関わり方が大切だと感じた。
	2	子ども1人に注目して見ると見えてくるものがたくさんあってとても勉強になった。また今度は他の子に注目して見てみたいと思った。子どもの性格等を理解した上で、見られたらもっと学びが深くなると思った。
指導者と子どものやり取り	1	他の保育者の指導を客観的にVTRで見ること、冷静に保育を見ることができ、学びが大きくなると思った。キーワードごとにグループで意見を交換することは、自分が気づけなかったことにも気づけて、自分の考えも深まるので、自分の保育観はこうだと決めつけるのではなく、他の保育を参考にしたり、保育者の考えを聞いて、自分の保育に対する考えを広げていくことも大切なのだと感じた。
	2	VTRを通して他の保育者の方を見ることで客観的に保育や子どもの様子を見ることができ、普段気づけないことに気付くことができると思った。また、同じものを見て人によって視点が違って、他の人の意見を聞くのもおもしろいと思った。
	3	一つの導入部分に関して、保育者や子ども動きや言葉などさまざまな視点をもって見ることに面白さを感じた。また、今回の保育者と子どものやり取りに重点を当ててみて、改めて子どもとの関わりのおもしろさと難しさを実感した。
	4	子どもに予想外の反応をされた際に、どのように活動を変化させていくかを瞬時に考えることの大切さを感じた。見ているとスムーズに行なわれている活動だとしても、細かい部分を見ていくと、細やかな対応がされていて、臨機応変に工夫されていると感じた。
	5	短いと感じる導入部分でも、子ども一人ひとりで楽しく感じる部分や、やってみたいと感じる部分が異なることはわかった。保育者の声掛けや触れ合いは、子どもが自分からやってみたいと感じることができるものである必要があると考えた。導入は子どもが遊びへスムーズに移れるようにすると同時に、これからすることへの見通しが立つものが良いと考えた。
言葉がけの指導者	1	VTRの現場にいた保育者たちが、指導中に感じたことや考えたことを聞いてみたいと思った。
	2	先生の臨機応変さがすごいと思った。
	3	1歳頃は、まねをして遊ぶ時期なので、何も見ず自分から動くということが難しいように思った。声掛けだけでは動いてくれないことが多く、実際に見せてみることで、進めていくことをメインにしていきたいと思った。
子どもの動き・表情・反応の変化	1	同じ「ちがう」といっている場面でも、解釈に違いがあることがわかった。保育者の働きかけによる子どもの変化を見ていたので、話し合えてよかった。
	2	子どもの「ちがう」について、人によってさまざまな捉え方をしていることがわかり、そのような考え方もあるのだとおもしろかった。現場でも自分の考えだけにとらわれず、他の人の考えも取り入れるべきだと感じた。
	3	子どもの行動を追ったグループだったので、追っている子どもが同じ人もいるかと思っていたが、5人とも違う子どもを観察していたのが興味深かった。
	4	実際の活動の導入部分を見たことで、指導者の声掛けやそれに対する子どもの反応を見ることができてよかった。一人の子どもにも注目すると、ある子どもに偏ると思ったけれど、実際にこの5人グループでも、誰一人かぶらなかつたのでおもしろいと思った。
	5	VTRを見て感じたことが他の人はどう思っていたのか知ることができてよかった。子どもの反応を細かく観察できて楽しかった。

とが記載されていた。

#### 4-4. 考察

前述の結果から、学生対象に実施したVTR視聴は、子どもの姿の捉えや指導者に求められる保育援助技術を具体的に学ぶ機会となったと考えられる。また、グループディスカッションを通して、自分自身が捉えた子どもの様子や変化とは異なる別の捉え方があることを知り、多面的に子どもを捉えることの必要性を学んだことは、今後、保育や教育に携わる上で重要な学びであると考えられる。

今回のVTR視聴が効果的であったと考えられる要因は、2回の視聴とグループディスカッションの実施である。1回目の視聴では、初めて見る活動の様子を追いながら、直感的に気になる場面を取り上げキーワード化した。キーワード化の課題により、VTR視聴への集中度が高まり、場面を把握することができたと考えられる。2回目の視聴では、対象児観察に手法を変え、一人の子どもに意識を集中させたことで、指導者の援助や子どもの姿の内面まで言及する感想となり、その効果が認められる。このように学生対象の子どもの活動に関するVTR視聴は、子どもの姿の捉えや指導者の適切な援助を学ぶ上で、効果的な方法と考えられる。

#### 5. まとめ

本研究は、「1, 2歳児一人一人が、周囲との関わりを通して、心で感じた思いを表現として表していく過程」についての検証を目的に、VTRの振り返りを行った。VTRは、公開研修「1, 2歳児の表現活動とふれあい遊び」の準備活動における指導者と子どもの初対面の場面である導入時の15分間を取り上げ、事例にまとめ分析した。その結果、Tの気持ちを添わせた表現の受容、子どもと徐々に気持ちが通じ合う様子、ふれ合いにあまり関心を示さなかった子どもが、Tと他児が楽しくふれ合う姿を見て、自分もやってみたいという気持ちが芽生え、その心の動きが手合わせや笑顔に表現される様子

を捉えることができた。このように指導者への信頼が芽生えた瞬間から自己発揮、他児とのふれ合いが始まる様子から、表現が他者との信頼の上に成り立つことが示された。

このようなTへの信頼の芽生えをより客観的に捉えることを目的として、学生対象にVTR視聴アンケートを実施した。2回の視聴による感想では、「子どもは自分の姿や存在が認められていることで安心して活動に取り組めるようになること」、「指導者の援助によって子どもの活動が活性化していく様子から、常に子どもの様子を見ながらどのような援助が必要かを考えなければならないこと」、「子どもの姿を認める声かけ、子どもの興味を持つ教材準備が必要であること」等、子どもとどのように関わればよいのか、子どもをどのように捉えていけばよいのか等、子どもと向き合うための考えが述べられていた。

このような保育者の援助や子どもの捉えに関する基本的な考えが示されたことは、VTRにおける指導者と子どもとの気持ちの通じ合いや信頼関係を読み取ることができ、1, 2歳児の思いが表現を通して伝えられていることを窺い知ることができるのである。

これらの結果を踏まえ、VTR視聴による表現活動の分析は、保育者の役割や子ども理解を深める上で効果的な振り返りであり教授法であると考えられ、今後は、適切なVTR資料の作成について研究を進める考えである。

#### 付記

本稿は、平成29年日本保育学会第70回大会でのポスター発表「1, 2歳児の表現活動に関する一考察—VTRの振り返りを通して—」を加筆修正したものである。

倫理上の配慮として、音声や映像の記録をとることについては、予め園長を含む保育者の同意を得、保護者に対しては、書面での周知を通して同意を得た。

## 参考文献

- ・ 文部科学省 『幼稚園教育要領解説』（平成20年10月）  
2008 フレーベル館
- ・ 厚生労働省 『保育所保育指針解説書』（平成20年告示）  
2008 フレーベル館
- ・ 内閣府・文部科学省・厚生労働省 『幼保連携型認定  
こども園教育・保育要領解説』 2015 フレーベル  
館
- ・ 西洋子 本山益子 子どもの身体表現 ～からだと  
こころ・あらわしてあそぼう～ 2015 市村出版
- ・ 今井和子 0・1・2歳児の心の育ちと保育 2011  
小学館
- ・ 今井和子 0歳児から5歳児 行動の意味とその対  
応 2017 小学館